

新しい世界観の人間—Edmund—について

*King Lear*の 一 考 察

岡 村 俊 明

< は じ め に >

King Lear (1605—6年制作) は、中世以来の神中心のオーソドックスな世界観(旧世界観)とルネッサンス以来の科学的、合理的思考による新しい世界観との対立相剋の時代に創作され、Shakespeare の戯曲のうちでも、特に二つの世界観の相剋が明確に見られる。しかも、その相剋がこの戯曲の重要な要素ともなっている。そして、この論文に取扱うのは新しい世界観を代表する Edmund に関してである。

まず、彼の社会での状況や、思想の特徴や、目的などを考える(I)。そして、このような特徴をもつ“New Man”^① に対する Shakespeare の判断はIIにおいて考究する。この論文の目的は、Shakespeare は“New Man” に対してどんな態度をとっているか、換言すれば *King Lear* を創作した時、Shakespeare はどんな世界観をもっていたかを調べることである。

最初にこの劇の特徴を考えなければいけない。*King Lear* は Shakespeare の他の劇と違って「二重構造」より成り立っている。A. C. Bradley は主筋と副筋に関して次のように述べている。

The secondary plot fills out a story which would by itself have been somewhat thin, and it provides a most effective contrast between its personages and those of the main plot, the tragic strength and stature of the latter being heightened by comparison with the slighter build of the former.... The sub-plot simply repeats the theme of the main story.^②

Bradley のこの考察はこの論文の解釈の一つの骨組となっている。特にIIにおいてはこの見方を可能なかぎりおし進めている。というのは、Edmund を解釈する場合に、彼個人をいくら考究しようとしても、あるいは sub-plot の中だけで矛盾する点、不明確な点を解決しようとしても、満足のいく解釈は困難であるといわねばならない。sub-plot には main-story に比べて不明確な要素が多

① J. F. Dandy, *Shakespeare's Doctrine of Nature* (London, 1949) 中での彼の造語。

② A. C. Bradley, *Shakespearean Tragedy* (London, 1904), p. 262

く、それと対応する要素が main-story にはより明確に表現されている。だから、Edmund の性格や彼につきまとった種々の点を解釈する場合に、しかも sub-plot のなかだけでは解釈されない場合には、main-story にある、それらに対応する、より明確に示されている点と比較対照している。この態度は、Shakespeare の他の戯曲を研究する場合には許されないかもしれないが、*King Lear* の構成が特異であることを考慮すれば、これは決して主観的な態度ではないことが了解されるであろう。

I

1. 社会における地位

我々は新しい世界観の人間—Edmund—の性格や、思想や、行動の原理を考えるのだが、その前に彼の社会における位置を知る必要がある。というのは、その位置の理解はそれらすべてを評価する非常に重要な手がかりを我々に与えてくれるからである。

Edmund は庶子である。彼の第一独白^③ から知ることが出来るように、庶子は“base”と考えられていた。それについて Kenneth Muir は注をつけている。“Bastard has apparently no etymological connexion with the adjective base, though ‘base son’ was used for ‘bastard’.”^④ そして、この劇では庶子であること、又それに対する軽蔑は非常に深い意味をもっている。彼が外面的に好意をもたれているようにみえても、人々は意識的にしろ、無意識的にしろ、常に侮蔑をもって彼をみている。J. F. Danby は言及している。“Shakespeare thought of him simply and inclusively as the Bastard, and ‘bastard’ is the Elizabethan equivalent of ‘outsider’, Edmund is a complete outsider.”^⑤ 彼が“outsider”であることを理解しなければ、Edmund の性格や思想などの原理を、又 *King Lear* を理解することが出来ないことになる。庶子に対する軽蔑がむしろ象徴的にまで高められて、他の登場人物の心の中に常に流れているが、これを例証してみよう。

Opening scene (劇全体の基調を示すが) では、Edmund の眼前で Gloucester が Kent に言う。

His breeding, sir, hath been at my charge: I have so often blush'd to acknowledge him,
that now I am braz'd to't. (1.1.9)

Gloucester は Edmund の母のことを猥雑に述べた後で、庶子を生んだ彼の罪について意識しながらも軽やかに言う。

③ Kenneth Muir(ed.), *King Lear* (The New Arden Shakespeare, 1950) のテキストによれば (1. 2. 1—22)。line-number については以下同じテキストに従う。

④ *Ibid.*, p. 24

⑤ *Op. cit.* p. 44

Do you smell a fault? (1.16)

Lear が嫡出の娘 Goneril の残忍さに驚いた時、彼は最も侮辱の言葉 “bastard” を使わざるを得ない。

Darkness and devils:
Saddle my horses; call my train together.
Degenerate bastard! (1. 4. 260—)

又、彼が非情の娘達のために気違いになった時「不親切」の典型であると思っていた庶子の Edmund と彼女達を比較せざるを得ない気持になる。

Let copulation thrive; for Gloucester's bastard son
Was kinder to his father than my daughters,
Got 'tween the lawful sheets. (4. 6. 117—)

Kent が知っているかぎりの最悪の言葉を使って Oswald にどなりたてる時、彼は “whoreson” (庶子) を付け加えることを忘れない。

A knave, a rascal, an eater of broken meats; a base, proud, shallow, beggarly, three-suited, hundred-proud, filthy woested-stocking knave; a lily-lived, action-taking, *whoreson*, glass-gazing, super serviceable, finical rogue,^⑥ (2.2.13—) (イタリック体は筆者)

そして、このような庶子 Edmund を生んだのは Gloucester の罪ならびに社会の罪であるということが出来る。何故ならば、Gloucester はその罪のために盲目になるが、それには神の摂理が働いているからである。Edgar の言葉に注意しよう。

The Gods are just, and of our pleasant vices
Make instruments to plague us;
The dark and vicious place where thee he got
Cost him his eyes. (5. 3. 170—)

このことは Lear と比較すればより明確になるだろう。大した罪を犯してなく、彼同様に苦しんで

⑥ Cf. (2. 2. 33), (2. 2. 64)

いる Lear が狂気になるのに対し、Gloucester は狂気になることを希望するが^⑦ ならず、正気のままで彼の苦悩をすどく感じ、自殺を企てても果すことが出来ないのは、「煉獄の苦しみ」を経て自分の罪を浄め、再生をする役割を彼がになっているからだといえよう。

庶子の性が「悪」であり、それは「善」と対立することは、次の科白に注目すればよい。その点について Edmund も彼の兄に同意する。彼は庶子の性が「悪」であることを認め、生存中に一度も良いことをしなかったことも認める。

some good I mean to do
Despite of my own nature. (5. 3. 243—)

そして、生まれながらにして Edmund は、社会のこの重荷の下に生きてきたといえる。社会や、神に対する彼の反撥、彼の完全な個人主義は幾分は「社会によってひきおこされた」、「社会に原因がある」といわねばならない。Danby は Richard の偏僕と Edmund の庶子であることについて言及している。

With both Richard and Edmund we feel that their resentment is understandable. Carried further, we are prepared to feel that their reaction might even be justified. Further still, and we come to the vague notion that Edmund and Richard are somewhat *caused*, as they claim to be, by the society they react against. They are both anti-social and expression of society. Their corruption is a breaking out of corruption hidden below the surface, implied in the conduct of the average people around them, but incapable of being brought to consciousness except by such experts in self-consciousness as the villain are.^⑧

私は Danby のこの説に殆んど同意する。しかし、これだけでは Edmund を理解出来ない点が出てくる。それはⅡで述べる。

2. 個人主義

Edmund は個人主義者である。生まれながらにして社会の“outsider”の彼は、自からの主義によって、同時に他の人間からも隔離されている。彼の個人主義は徹底している。彼は人間を彼の目的の障害物か補助物としてしか考えない。

彼は心の中では Lear に忠誠を示さない。彼は父や兄を尊敬の念や、兄弟愛でもってながめてい

^⑦ Cf. (4. 6. 283—)

^⑧ *Op. cit.* pp. 64—65

ない。彼等は全て彼の目的の手段としてのみ彼と結びついている。実際は、Edmund は彼等とは完全に離れているわけだ。個人主義者の典型的な例は最後の場面にみられる。結婚の約束をしていた二人の女—Goneril と Regan—の死体が運びこまれ、その場はまったく悲惨になる。その時彼は言う。

Yet Edmund was below'd:
The one the other poison'd for my sake
And after slew herself. (5. 3. 239—) (イタリック体は筆者)

Edmund の全ての考えは彼自身についてである。彼はこの二人の悪い女の死をひきおこした自分の罪や、死の悲惨については、ちっとも考えない。自分が愛されていたということ、即ち自己中心の点でしか考えない。彼の考えは、何時、どんな場合にあって、自己中心的である。これは彼の著しい特徴である。

彼と対照して、旧世界観の人々は互いに密接な関係をもっている。彼等は他の人に仕えるし、また仕えられる。第1幕の Lear は勿論大勢の人に仕えられている。彼が娘達に見捨てられた時でさえ、Fool や Kent に心から世話されている。又、彼も人を愛して、彼等と結びついている。エゴイストで個人主義者であるようにみえる Goneril や Regan でさえ、Edmund が好きになり、愛を誓う。しかし、Edmund は心のうちでは彼女達を決して愛してはいない。

個人主義者である彼は感情や悟性を持たない。理性のみ人間である。彼の appearance と reality の間に大きな差異があり、それを彼が維持出来、人が彼の正体を見破ることが出来ない理由はそこにある。Goneril や Regan に口では愛を誓っておきながら、そのどちらを選ぶべきかについての彼の態度には利己的な、冷やかな理性しかない。次の引用句に見られるとおりである。

To both these sisters I sworn my love:
Each jealous of the other, as the sting
Are of the adder, which of them shall I take?
Both? one? or neither? (5. 2. 55—)

3. 目的と行動

Edmund の目的と行動をこの劇の始めからたどることにする。彼の第1独白(1. 2. 1—22)では、庶子であるために身分が低く、卑しいという偏見に彼は抗議している。その偏見が根強く、不合理に思えた。彼の第一義的関心として彼の心をしめているものはこの抗議以外に何もない。しかし、彼は父の領土を相続するという目的をもっている。

この抗議と目的とはどんな関係にあるか。又、後に発展する王位継承という目的と前二者とはどんな関係にあるだろうか。これらについて彼の心の発展をたどることは、Edmund の性格や論理を一層よく知ることになる。ここでは偏見に対する抗議が第一義的で、その手段として、嫡子を打負かし、父の領地を相続するのである。この関係が劇の進行に従って、どのように発展、変化するかを考察しよう。

彼が外国から帰ってくると、時を移さず Gloucester や Edgar をだます。彼等の馬鹿正直を見抜くと、すぐさま彼の目的は変化する。領地に対する欲望が前面に出てきて、その偏見に対する社会への反抗心は後退する。Edmund は独白する。

on whose foolish honesty
My practices ride easy! I see the business.
Let me, if not by birth, have lands by wit:
All with me's meet that I can fashion fit. (1. 2. 188—)

彼はこの目的をなすとげようとして、突進する。彼の心の中では目的が手段を正当化する。Cornwall がくるという報せを聞くやいなや、まだ不明確であったこの計画を徹底的に行動に移す。次に引用するように、彼は非常に頭の回転の早い opportunist である。

The Duke be here to-night! the better! best!
This weaves itself perforce into my business.
My father hath set guard to take my brother. (2. 1. 14—)

何事によらず彼の目的に適っているものを利用する。“all the kingdom / May have due note of him.” (2. 1. 83—) という Cornwall の言葉によって、彼は Gloucester を欺くことに成功したと言える。そして、彼の第1独白で第二義的に意図された目的は成就された。ついに父の領土を相続する Gloucester の許可を彼は得る。

And of my land,
Loyal and natural boy, I'll work the means
To make thee capable. (2. 1. 83—)

そして、当然のことながら、Gloucester が死ねば、彼は Gloucester 伯になる。彼に必要なのは、手を下さずに、それを待つだけだ。しかし、彼の決心は更に発展する。

This courtesy, forbid thee, shall the Duke
Instantly know; and of that letter too.
This seems a fair deserving, and must draw me
That which my father loses: no less than all.
The younger rises when the old doth fall. (3. 4. 23—)

彼は父を失脚させようとする。Cornwall が禁じていたのだが、Gloucester は王を介添している。それを彼は Cornwall にみつつけさせる。ついに彼は Cornwall の許可を聞くことが出来た。

true or false, it hath made thee Earl of Gloucester (3. 5. 17—)

そしてこのあたりになると社会に対する彼の抗議は影をひそめている。彼もそれに言及せず、ただ Gloucester の伯位と領地を相続する目的に向かって邁進してきた。そして彼の目的は果されたのだ。しかし、彼はこの成功に満足の気持を示さない。それどころか、彼の目的は「間髪をいれずに」変化していく。しかも新しい目的は、彼は以前には全然我々に暗示してもいず、彼自身も意図していなかったと思われる。この新しい目的は、彼が後ほど (5. 2. 55—) 明らかにするように、王位篡奪である。第一の目的の成就直後、彼は王位をねらう。これを証明する必要があるが、それには Edmund と二人の女—Goneril と Regan—との関係をたどる必要がある。

5幕7場で Edmund は Gloucester の城を出て、彼女の夫の城へと Goneril と旅をともにする。それにはまる一日かかった。^⑨ そこに着いて (4. 2. 19), Goneril は Edmund に重大な含みの言葉をもらす。

This trusty servant
Shall between us; ere long you are like to hear,
If you dare venture in your own behalf,
A mistress's command. Wear this; spare speech;
Decline your head: this kiss, if it durst speak,
Would stretch thy spirits up into the air.
Conceive, and fare thee well.

彼女は“mistress”に二重の意味をもたせており、Edmund に自分の夫 Albany を殺害することをたのむ意図もおわせている。Heilman が言っているように、“several kinds of sex innuendo”

⑨ 時の経過について
(Day 6. (2. 7), (4. 1)
Day 7. (4. 2)

— (“spirits” and “conceive”)^⑩ がある。二人の関係は推して知ることが出来る。

次に Regan とはどんな間柄であったか。Edmund は Regan と彼女の城で会う。その後 Goneril の使いの Oswal に向かって、彼女は彼との仲を次のように暗示する。

My lord is dead; Edmund and I have talk'd
And more convenient is he for my hand
Than for your Lady's. *You may gather more.* (4. 5. 30—)(イタリック体は筆者)

彼女達二人との関係は愛のためであろうか。しかし、愛とはおよそ縁遠い彼の科白に注目すれば、その答えは否定的であるといわざるを得ない。

To both these sisters I sworn my love:
Each jealous of the other, as the sting
Are of the adder, which of them shall I take?
Both? one? or neither? (5. 2. 55—)

彼女達の関係について彼は常に目的をもっていることが了解されよう。そのためには、Goneril を取ってもいいし、あるいは Regan を選んでもよい。又は二人を捨ててもよい。それでは彼の目的は何であろうか。次の言葉に注意しよう。

And hardly shall I carry out my side,
Her husband being alive. (5. 2. 61—)

“Edmund aspires to the kingship.”^⑪ とそれについて G. L. Kittredge は注解している。Edmund はその目的のために、Albany が助けようとした Lear と Cordelia を殺そうとした。彼が Regan を利用した目的は、彼女の軍隊を率い、彼女の権力を委託してもらい、Albany と対等になろうとしたことである。そのために愛を誓う必要があった。そして、Goneril との関係によって戦争後に彼女をそそのかして夫を殺さす予定であった。そして、最後には王位につくことが出来る。これが彼の目的であった。ここで注目しなければならないのは、王位篡奪の意図を第1独白でも、劇のはじめでも彼は持っていなかったことである。そのうえに、父の領土を相続しようとねらっている時には、初期の大目的である社会に対する抗議も忘れてのようにみえる。それで、領土獲得に成功するやいなや、「突然」に王位にのぼろうとする。目的の突然の変化は、王位篡奪と

⑩ R. B. Heilman, *This Great Stage* (Louisiana, 1948), p. 314

⑪ G. L. Kittredge (ed.), *King Lear* (The Kittredge Shakespeare, Boston, 1941), p. 225

関連のあるその直後の Goneril を利用する態度を考察すればわかる。しかし、王位篡奪が彼の本当の目的であろうか。Edmund にあっては、目的が矢つぎばやに変化することが可能であろうか。しかも奇妙なことに、彼は Shakespeare の史劇、悲劇の王位篡奪者の大きな特徴を欠いている。Shakespeare の史劇や悲劇には王位篡奪者がいるが、彼等にはほぼ共通した特性がある。王位の偉大さを、それを得たいという願望を身にしみるほど持っている人たちである。これらの特性を Edmund は全然持っていない。彼はただ前進しているだけである。王位について後で何をするか、国を如何に統治するかを全然考えていない。そこで、我々はこれ以外に Edmund の目的があると、二つの目的はただ外部にあらわれている仮面ではないだろうかと考える必要がある。もう一度彼の言葉に注意しよう。Edmund は王になる意図を示した直後、次のように続ける。

My state

Stands on me to defend, not to debate. (5. 2. 64)

当然のことながら、彼は王の嗣子ではない。その彼が王になることは決して「身を守る」ことではない。これは明瞭な論理である。彼自身も心では気がついている。するとここでも、彼は社会の呪いから自身を防禦していることになる。そのために偶然的に王位を望むようになったと我々は推論せざるを得ない。結局、彼の目的はただ一つであること、そのための思想であり、行動であることに注目しなければいけない。我々は劇の進行に従って、この悲劇の本質を見失いがちである。というのは、追放されてはいたが彼はここでは好意的に扱われていると思われる。しかし、庶子に対する軽蔑は、我々が見てきたように深い底流となって劇全体を流れているのだ。

4. 論理と世界観

Edmund の論理の特徴を考えてみたい。まず我々は Gloucester の次の言葉に注意する必要がある。

He (Edmund) hath been out nine years, and away he shall again. (1. 1. 32—)

その時まで Edmund は、Gloucester や Edgar がいた社会には、住んでいなかっただけになる。何故彼は嫡出の Edgar と違って青年時代には家庭生活の味を知らなかったし、又これからも知ることが許されないのか。斎藤勇は Edmund が国外にいた理由は「私生児であるために追放されたのであろう。」¹⁹ と云っている。確かに、我々は庶子に対する偏見があまりにも強いことは

¹⁹ 斎藤勇 他訳「シェイクスピア」(東京・築摩書房), p. 318

見てきたところである。W. I. Craig は *Two Gentlemen in Verona* の1幕3場 (ll. 7—11) と比較して、Edmund は “in foreign parts pushing his fortune” と推測している。これは従属的な理由にはなるかもしれないが、主な理由は偏見のために彼を国外に「追放」したことであり、といてよい。彼の社会における地位や個人主義の論理やその目的を考えるならば、この推論が妥当であると首肯されよう。

青年時代の9年間の追放は旧世界像を見るどんな目を彼に与えたか。生れながらにして彼自身に与えられた偏見を彼はどう考えたか。この重荷を背負った Edmund が社会に出てどのように彼自身を主張することが出来るのか。結論から先に言えば、彼は物理的、生物学的力が何にもまして優先する世界に、それらの答えを見つけることが出来た。旧世界に対する彼の反抗は “New Man” としての見地からなされている。そして9年間の国外追放がこの糸口を彼に与えたと言える。というのは Edmund が他人を欺す時には (1. 2. 125—157, etc.), 旧世界観の人として考え、行動しており、その世界観を熟知している。そして彼の心の中では、旧世界観と新世界観は明確な断絶のかたちをとっており、彼は意識的に新世界観を信じている。このような明確な意識の断絶は、ある世界観が主な思潮である一つの社会にのみ住んでいるだけでは、形成されることは困難である。Shakespeare は Edmund の国外追放が庶子に対する強い偏見のせいであることを示すと同時に、明確に意識している Edmund の “New Man” としての思想を、長期の追放によって、無理なく観客に納得させている。Goneril や Regan は Edmund と殆んど同様な考えをもっているが、明確な主義、主張の域には高まっていない。彼女達が十分な意味において「新しい世界観の人間」とは言えないのは、彼女が一つの社会の中だけで生活していたという理由にもよるものであろう。

新世界観について述べている Edmund の科白に注目しよう。如何に彼が庶子としてのコンプレックスを感じ、その偏見に、又社会に反抗しているか明確であろう。

Thou, nature, art my goddess; to thy law
My services are bound. Wherefore should I
Stand in the plague of custom, and permit
The curiosity of nations to deprive me,
For that I am some twelve or fourteen moonshines
Lag of a brother? Why bastard? Wherefore base?
When my dimensions are well compact,
My mind as generous, and my shape as true,
As honest madam's issue? Why brand they us
With base? with baseness? bastardy? base? base?
Who in the lusty stealth of nature take
More composition and fierce quality
Than doth, within a dull, stale, tired bed,

Go to th' creating a whole tribe of fops,
 Got 'tween asleep and wake? (1. 2. 1—)

Edmund は鋭い知性をもった理論家である。彼は旧世界観にとらわれず、物事をありのままに見ようとしている。庶子は卑しいという偏見があるが、それは優秀だと反撥する。法律的に正式な夫婦は惰性的な肉体関係を持ち、「馬鹿者ども」しか生まないが、内縁関係の男女は “more composition and fierce quality” をもった子を生むと。しかし、庶子の肉体的優秀さを示せば示すほど、彼は正式な結婚を拒絶し、従って社会道徳、秩序（エリザベス朝では社会を支える特別に重要な要素であるが）を無視するようになる。そして、このコンプレックスに基づく彼の論理は更に発展して、当時の世界観と殆んどあらゆる面に対立する、一つの異質の世界観を形成することになる。彼の世界観には今日の我々の目からみても、同情出来ない要素が多いけれど、Goneril や Regan と違って全面的に否定出来ない点があるのは、科学的、理論的思考もあるからでもある。例えば、彼は旧世界観の人々と違って、自然の中に物質的因果律しか認めない。自然は前もって限定されている構造物であって、自然界と人間界の対応や相互関係はないと彼は考える。次に引用する Gloucester と Edmund の科白はこの世界観の違いを明確に表わしている。科学が発達した今日においては Edmund のこの考えが正しいと認められようが、当時までは Gloucester の考え（旧世界観）が正統的であったことに、我々は注目しなければならない。

Glou. These late eclipses in the sun and moon portend no good to us: though the wisdom of nature can reason it thus and thus, yet nature finds itself scourg'd by the sequent effects. Love cools, friendship falls, brothers divide: in cities, mutinies; in countries, discord; in palaces, treason; and the bond crack'd 'twixt son and father. This villain of mine comes under the prediction; there's son against father: the king falls from bias of nature; there's father against child. We have seen the best of our time: machinations, hollowness, treachery, and all ruinous disorders follow us disquietly to our graves. Find out this villain, Edmund; it shall lose thee nothing: do it carefully. And the noble and true-hearted Kent banish'd! his offence, honesty! 'Tis strange. [Exit.

Edm. This is the excellent foppery of the world, that, when we are sick in fortune, often the surfeits of our own behaviour, we make guilty of our disasters the sun, the moon, and stars; as if we were villains on necessity; fools by heavenly compulsion, knaves, thieves, and treachers by spherical predominance, drunkards, liars, and adulterers by an enforc'd obedience of planetary influence; and all that we are evil in, by a divine thrusting on. An admirable evasion of whoremaster man, to lay his goatish disposition to the charge of a star! My father compounded with my mother under the dragon's tail, and my nativity was under *Ursa major*; so that it follows I am rough and lecherous. Fut! I should have been that I am had the

maidenliest star in the firmament twinkled on my bastardizing. (1· 2. 106—)

そして二つの世界観の対立はこの劇の大きな特徴でもある。Shakespeare は出来るだけ劇のはじめのほうにこの相剋を呈示し、それが *King Lear* の重要な要素であることを強調している。次には、Edmund を中心にして、彼と対立している思想はどのようなものであるかを具体的に考察してみよう。

Edmuud は肉体優越の世界を至上と考えているが、その世界からは老人をどのようにみるであろうか。まず、旧世界観の人々の老人に対する考えを考察する必要がある。

Albany は老令の Lear に対する Goneril の仕打を憤って言う。

What have you done?
Tigers; not daughters, what have you perform'd?
A father, and a gracious aged man,
Whose reverence even the head lugg'd bear would lick. (4. 3. 39—)

Cordelia は嵐の荒野へ Lear を追いやった彼女の姉達のことを思い出し、老人への同情心と父に対する尊敬の念でもって言う。

Had you not been their father, these white flakes
Did challenge pity of them. Was this a face
To be oppos'd against the warring winds?
To stand against the deep-bolted thunder?
In the most terrible and nimble stroke
Of quick, cross lightning? to which—poor perdu—
With this thin helm? (4. 7. 30—)

彼等は老人の弱さを利用しようとも、傷つけようともしない。老人は尊敬と同情で世話されなければならない。彼等は老人の弱さのゆえに老人を一層愛する。この劇の旧世界観を信じている人々はみな共通してこの性質をもっている。

Edmund の老人観は完全に彼等のそれと対立している。Heilman は次のように言及している。“Age is a crime where the chief value is physical force.”^⑬ Edmund は、老令が人間に同情や尊敬をおこさせる世界とは違った世界に生きている。彼が父をに裏切ろうと決心した時、冷たい計算

⑬ W. I. Craig (ed.), *King Lear* (The Old Arden Shakespeare), p. 5

⑭ *Op. cit.* p. 142

以外の何物も示しはしない。

This seems a fair deserving, and must draw me
That which my father loses—no less than all.
The younger rises when the old doth fall. (3. 3 24—)

次の引用句は *Edmund* の老人観が先にあげた人のそれといかに違っているかをよく表わしている。「老人には魂力がある。」——彼はそのことに実際上の危険しか見ない。

Sir, I thought it fit
To send the old and miserable king
To some retention and appointed guard;
Whose age had charms in it, whose title more,
To pluck the common bosom on his side
And turn our impress'd lances in our eyes
Which do command them. (5. 3. 46—)

彼が *Gloucester* を贖手紙で欺そうとする時には、皮肉にも彼の優生学的見方を示している。

Sons at perfect age, and father declin'd, the father should be as ward to the son, and the son manage his reverence. (1. 2. 71—)

This policy and reverence of age makes the world bitter to the best of our times; keeps our fortunes from us till our oldness cannot relish them. I begin to find an idle and fond bondage in the oppression of aged tyranny, who sways, not as it hath power, but as it is suffer'd. (1. 2. 47—)

Cordelia の見方と *Edmund* のそれとの間には著しい違いがある。彼と *Goneril*, *Regan* は同じような見方をもっている。^⑮ そしてこの二つの「派」の相剋は「優生学的世界」と「慈悲にあふれた世界」との相剋でもある。

⑮ *Goneril* の老人観は彼女の次の言葉からもわかるであろう。

How have I offended?
All's not offence that indiscretion finds
And dotage terms so. (2. 4. 147—)

Heilman は述べている。This “is *Goneril*'s favourite word for age: it is her way of denying that age has dignity or respects, and that it has a place in Nature; she conceives of it only as a state which compels submission to her and her sister's desires.” (p. 141)

次に、父に対する関係—“bond of childhood”—について Edmund はどう考えるか。まず、旧世界観の人々の考えをみよう。

Lear は娘 Goneril の異常な残忍さを思い出して Regan に訴える。

No, Regan, thou shalt never have my curse:
 Thy tender-hefted nature shall not give
 Thee o'er to harshness: her eyes are fierce, but thine
 Do comfort, and not burn. 'Tis not in thee
 To grudge my pleasures, to cut off my train,
 To bandy hasty words, to scant my sizes,
 And in conclusion, to oppose the bolt
 Against my coming in. Thou better know'st
 The offices of nature, bond of childhood,
 Effects of courtesy, dues of gratitude. (2. 4. 172—)

Dandy は次のように説明する。

Lear's theology of nature here is neither pagan nor Ancient British.... Lear's nature...is a structure ascending from primordial matter up to God. It, too, takes for granted that parents are to be honoured and human decencies observed.^⑯

Theodore Spencer も亦、親子の関係について説明している。“He (Lear) had expected to fulfil the natural law by honoring their father...”^⑰ もし我々が当時の父に対する絶対的な尊敬と従属を知らないならば、Cordeliaの単純な答え (“Nothing, my lord...”) や、Gonerilの不親切さに対する Lear の猛烈な驚き（下に引用）を理解出来ない。

O Regan, she hath tied
 Sharp-tooth'd unkindness, like a vulture, here.
 I can scarce speak to thee; thou'lt not believe
 With how deprav'd a quality—O Regan: (2. 4. 135—)

次に、Edmund について。Edmund は父を裏切ろうとしているが、世界観の相違を思想的に意識しているから、良心の可責を感じない。父を冷たい計算の態度でみる。

^⑯ *Op. cit.* p. 141

^⑰ Theodore Spencer, *Shakespeare and the Nature of Man* (New York, 1942), p. 28

This seems a fair deserving, and must draw me
That which my father loses. (3. 4. 25—)

盲目の父が人々に同情心をひきおこすかもしれないことを聞き、彼を殺そうとする。Goneril がそれについて言っている。

Edmund, I think, is gone,
In pity of his misery, to dispatch
His nighted life. (4. 5. 11—)

我々は Edmund の老人観や親子観をみてきた。彼は他人を足下に踏みつけてでも、自分の欲望のことしか考えず、自分の成功のためにしか働かない。いかなる物事にもまして、彼の欲望の優先権をもっているわけだ。我々はこれらの特徴をもった Edmund を「特に」悪者扱いにしがちである。というのは、いつの時代でもほぼ共通して流れる「老人」観、「親子」観があるが、その為に我々は彼を悪くみるのである。Edmund は Machiavellianism をもっていて、「良心」「同情」「愛」を排斥している。ある面においては、意識的にそれらを排除しようとする。Edmund は科学的、合理的思考法を身につけた人でもあり、又目的のためには手段を選ばない、奸策を妥当しようとする時代思潮にも生まれた人であったから、現代的感覚のみで彼を否定してはいけぬ。次の Danby の説を参考のために引用しよう。

Edmund belongs to the new age of scientific inquiry and industrial development, of bureaucratic organization and social regimentation, the age of mining and merchant-venturing, of monopoly and Empire-making, the age of the sixteenth century and after: an age of competition, suspicion, glory. He hypostatizes those trends in man which guarantee success under the new conditions— one reason why his soliloquy is so full of what we recognize as common sense.^⑩

II

1. Edmund は悪党であるか

Edmund は悪党であるという説は圧倒的に多いことは言うまでもない。Shakespeare の判断はどうであったのか。既述したように、Edmund の世界観は二つの要素—科学的思考法とマキャベリ

^⑩ *Op. cit.* p. 46

ズムの態度一から成立している。倫理的考察を主体としているこの項では、彼のマキャベリズムの態度についてみる。

Edmund は生まれながらにして、社会の軽蔑を身におっている。彼の行為はいく分「社会に原因」があると言えよう。しかし、彼は残忍な、冷血な、非人道的な行為を平気でしている。果さなかったけれども父を殺そうとした。Cordelia を殺させ、その罪の責任を逃れようとした。これら全ての彼の行為は、彼の「原因」によって許されるだろうか。あるいは両者の世界観の相違だといって、我々はわりきれんだろうか。Shakespeare は彼をどのように書いたか、同情をもって書いているだろうか。しかし、Shakespeare の同情如何については、Edmund 個人だけを考えても、我々は明確に知ることは出来ない。その判断の根拠となるものは少ないからである。King Lear の構造の特徴に注目して、main-story と sub-plot とを比較したり、両者に出てくる共通なパターンを参照する必要がある。

まず、Edmund は社会に対する偏見のために苦しみ、異質な世界観を身につけ、社会に復讐するためにも、残忍な行為をするのであるが、いわゆる彼のような逆境にあえば人々はみな復讐するであろうか。ここでは<はじめに>で述べたように、Bradley の考察を可能なかぎりおし進めている。

Main-story の Cordelia, Kent の逆境について考えてみよう。彼等は自分達に何の責任もない逆境と闘わなければならない。まさしく、Edmund のように復讐する「原因」があるわけだ。Shakespeare は double plots を使って、「原因結果のテーマ」を繰返しているのは注意に値する。

Kent の逆境。Lear が彼の王国を二人の邪悪な娘に分けようとした時、Kent は彼に忠告する。死刑にすると威喝されてもなお彼は王を諫めようとする。忠義の前には死は彼に何の意味ももたないのだ。

My life I never held but as a pawn
To wage against thine enemies; nor fear to lose it,
Thy safety being motive. (1. 1. 155—)

彼の忠義心は絶対的である。彼は追放を命じられる、けれども変装までして、王を助けようとする。嵐の荒野では必死になって Lear を助ける。Lear は彼にとって生命そのものであると言えよう。Lear が死んだ時には、彼はもう生きてはおれない。乱れた国を統治してくれという Albany の申出に次のように答える。

I have a journey, sir, shortly to go;
My master calls me, I must not say no. (5. 3. 320—)

Thou art a soul in bliss, but I am bound
Upon a wheel of fire. (4. 7. 46—)

とにかく、どんな逆境にあっても、Kent や Cordelia の愛は変わらない。そして、彼等を逆境にあわせた人に復讐をしないどころか、決して見捨てもしない。彼等は社会に抗議もしていない。彼等の愛は因果律をこえている。

Edmund は逆境にあって苦しむが、この劇には苦しみそのものの絶対性を否定する要素もある。価値観。この劇での価値観は固定的でなく、柔軟性がある、客観的でなく、主観的である。他人の悪意とか、逆境は必ずしも人を苦しませ、惨めにし、不幸にさせはしない。例えば sub-plot の中の Edgar を例にとろう。

彼は次のようなみなりをする。

the basest and most poorest shape
That ever penury in contempt of man,
Brought near to beast. (2. 3. 7—)

彼は運命のどん底にいるわけだ。そして実際に惨めであった。しかし、彼は気違いの Lear をみると、次のように独白する。

When we our betters see bearing our woes,
we scarcely think our miseries our foes.
Who alone suffers, suffers most i' th' mind,
Leaving free things and happy shows behind;
But the mind much sufferance doth o'erskip,
When grief hath mates, and bearing fellowship. (3. 6. 105—)

彼は極度の不幸にありながらも、Lear と比較すると絶対的に惨めとは感じなくなる。彼の不幸は比較的軽減されたわけだ。4 幕 1 場では、彼は自分の最悪の状態について不平を言わなくなる。

Yet better thus, and known to be contemn'd,
Than, still contemn'd and flatter'd, to be worst.
The lowest and most dejected thing of Fortune,
Stands still in esperance, lives not in fear. (ll. 1—4)

main-story では Lear の例をとればより明白になる。彼は王の威厳と光栄をそなえ、家来にと

りまかれている時が一番幸福であるようにみえた。しかし、娘に裏切られ、嵐の荒野をさまよい歩く。その窮地を見かねて、Gordelia が戦いをおこしてくれたけれども、彼等は敗れ、二人は牢獄につながれる身となる。王の身で牢獄に行かねばならない。しかし、そこへ行く途中が、皮肉にも Lear にとっては最も幸福な時である。

Come, let's away to prison;
 We too alone will sing like birds i' th' cage:
 When thou dost ask me blessing, I'll kneel down,
 And ask of thee forgiveness; so we'll live,
 And pray, and sing, and tell old tales, and laugh
 At gilded butterflies, and hear poor rogues
 Talk of court news; and we'll take with them too,
 Who loses and who wins; who's in, who's out;
 And talk upon's the mystery of things,
 As if we were God's spies: and we'll wear out,
 In a wall'd prison, packs and sects of great ones
 That ebb and flow by th' moon. (5. 3. 8—)

これら以外に Gloucester の例もある。劇全体に流れているのであるが、苦悩の価値観は柔軟性があること、又幸福観は主観的であること、絶対的な不幸はないことがわかる。だから、人が自分自身の境遇（どんなに悪いものであっても）に満足するか否かは、外的な条件では決してなく、人の心のもち方次第なのである。

しかし、Shakespeare は一方では庶子に対する偏見が非常に強いことも強調している。しかし、ここで注意しなければならないのは、逆境とか、それに依存する幸福観は、人間の世界観の相異から生まれるものではなく、それ以前の問題であること。というのは、Edmund の世界観はそれを根拠にして生まれたものであって、新世界観をもっているために不幸となり、逆境に反抗したからではないからである。このことは、倫理的な面からのみ言えば、彼の新世界観のよってきたる根拠そのものをくつがえすものである。

このように考察すれば、我々は Edmund を悪党と考えるだろう。しかし、Edmund の death-scene を考えれば、Shakespeare が彼を同情をもってみつめていることがわかる。

2. Edmund の death-scene

ここでは Shakespeare がどちらの世界観をもっているか、彼の Edmund に対する判断は如何なるものであるかを考察する。二つの自然観の対立については述べてきたが、Shakespeare がどの自

然観をもっているかは議論のわかれるところである。E. M. W. Tillyard, Theodore Spencer, I. A. Duthie などの学者は Shakespeare が新世界観を信じているとし、J. F. Dandy は新世界観だとしている。文字通り “doctors disagree” であるが、Shakespeare の世界観を単純、素朴な仕方でも明確に証明することが出来る。Edmund の death-scene が我々にその重要な手がかりを与えてくれるのである。

次の引用句は *King Lear* の最後の場にある Edmund の臨終の言葉である。

I pant for life; some *good* I mean to do
Despite of my own *nature*. (5. 3. 243—) (イタリックス体は筆者)

“mine own nature”—bastard であること、その性質—は悪かったことを、又彼は生存中に善をしなかったことを、又彼が以前に考えたことも悪かったことを彼は認めている。彼は新世界観を信じ、庶子が卑しいことを認める旧世界観に反抗した。しかし、最後に彼は態度をかえて旧世界観の上に立つようになり、それから彼自身の以前の世界観を批判するようになる。Edmund を拒絶し、彼が考え、行為してきた世界を、Shakespeare は拒絶している。新世界観と旧世界観との対立において、Shakespeare は劇の最後になって、旧世界観の代弁者であることを示した、といえる。この事実は否定することが出来ない。しかし、次の二つの理由により、Edmund に対する Shakespeare の判断について、これのみでは我々に十分に満足すべき解釈を与えているとは言えない。同様に新世界観の代弁者である Goneril と Regan は Edmund と違って、彼女達の死ぬ前に後悔することを許されなかったという事実と、Edmund は death-scene では以前と違って同情をもって描かれているという事実である。

Goneril と Regan の death-scene について。Albany は彼女達に警告する。

If that the heavens do not their visible spirits
Send quickly down to tame those vilde offences,
It will come,
Humanity must prey on itself,
Like monsters of the deep. (4. 2. 46—)

そして、彼女達の死に際して、彼のこの判断が正しいことが証明される。Goneril は妹を殺し、後で自殺する。Albany は妻である Goneril の死に対して全然天に不平を言わない。

This judgement of the heavens, that make us tremble,
Touches us *not with pity*. (5. 3. 231—) (イタリックス体は筆者)

彼女達の死は同情をもってではなく、厳格な retribution をもって書かれている。しかし、Edmund は彼女達と殆んど同じ程度の極悪をしたにもかかわらず、二つの death-scene には大きな違いがある。何故だろうか。

Edmund の death-scene について。Edmund のイメージは彼が Albany の強い主導権の主張や、挑戦者の攻撃にあうと突然に変わる。彼は明敏な合理主義者であるが、Albany の主張に反対することが出来なかった。²⁴ これは、Edmund が現下の状況に対処出来なかった最初のことである。その後、一時に何度も失策を繰返した後、彼は素性を名乗らない挑戦者と戦って死ぬことになるが、Goneril の言うように “the law of nature” によって、挑戦をうけなくともよかったのだ。

This is practice, Gloucester:

By th' law of war thou was not bound to answer
An unknown opposite; thou art not vanquish'd,
But cozen'd and beguil'd. (5. 3. 151—)

彼の像の変化は父の死を聞いた時にまた現われる。²⁵ 彼は言う。

This speech of yours hath mov'd me

And shall perchance do good.

(イタリックス体は筆者)

「理性」の固い層からのみなりたっているエゴイストの彼が感動したのもはじめてのことである。又、最後に決心をかえて、Cordelia を死から救おうとした。

とにかく Shakespeare は最後のどたん場になって、一時に彼の像に完全な修正を加えている。これは勿論、Shakespeare が Edmund と彼の自然観を拒絶したという意味だが、拒絶だけであれば、Goneril や Regan のように、彼の態度の変化も、後悔もなく、彼を殺すことで十分であろう。この場での Edmund の描写は詳細をきわめ、生々と、感動的に書かれている。すると我々は二つの矛盾する事実に出くわす—Shakespeare は旧世界観の支持者であること、新世界をもっている Edmund の拒絶は同情をもってなされていること。

この矛盾から我々は次のように推測することが出来ないであろうか。Shakespeare はこの劇の一般的基調としては、Edmund を拒絶する。しかし、旧世界観を信じていた Shakespeare の心の中にをさえ、当時の相剋している時代思潮を明確に反映して、二つの世界観に関して少しのコンフリ

²⁴ Regan の夫の死後、彼女に権力を委託された Edmund は Albany と同じ権力をもっていることに注意しよう。

²⁵ 盲目の Gloucester についての話を聞いた時、彼を殺そうとした Edmund と比較しよう。

クトがあった。それが最後の場での Goneril や Regan とは区別される Edmund に対する同情という形で現われてくる。Edmund の庶子という身分に対し、又その上に成立した科学的、合理性をもかねそなえた彼の世界観に対して、Shakespeare は殆んど劇の終りにいたるまで冷徹な目でみてきたが、どたん場になって、彼の態度が急変し、Edmund を暖かい目でみるようになった。King Lear 創作当時の Shakespeare の心にはこのような変化と相剋がみられるのである。